

---

# 恋した人々

皿尾 りお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋した人々

### 【Nコード】

N3295D

### 【作者名】

皿尾 りお

### 【あらすじ】

恋をしたあなたに贈ります。本当に、幸福は過去にしか存在しないのでしょうか？

夢はあった。一度も試してみたことはないが……。

異様に白い天井を眺めながら、幸雄は思った。

いつからだろう・・・それを夢だと思い始めたのは……。

薬の抜けきらない頭で考えてみても、それは、もはや幸雄にとってどうでもいいことに思えた。いつもそうだった。遅すぎるのだ。気づいたころには、いつも遅い。そして、その積み重ねとして目の前には、病院の不自然なほど白い天井があった……。

朝の山手線は満員にもかかわらず、いつもの時間にいつもの場所に寸分たがわず（幸雄にとってだが）停車した。いつもと同じ朝。

幸雄はいつもの吊り革の位置につかまり、流れる外の景色を眺めた。外には初夏の日差しが広がり、いつもは毒々しく見える雑多な広告看板も、色鮮やかに映える。いつもより少しだけ、心の温度が上昇するような朝。色鮮やかな色彩が、心のテンポを軽快なリズムに変える。幸雄はしばらくそのリズムを楽しむことにした。

しかし、軽快なリズムも長くは続かなかった。一枚の看板が、幸雄のリズムを狂わせる。

どうして生きているの？

どうして生きているの？・・・幸雄は胸の中でぼんやりと繰り返した。繰り返すと同時に、昔を思い出した。もはや、心のテンポなど存在しなかった。タバコの広告看板であるそれは、幸雄がまだ大学生の頃の記憶を甦らせた。

美由紀だ。当時、付き合っていた彼女の言葉だ。彼女はいつも唐突だった。

その日は、二人で銀座に繰り出していた。ショーウィンドウに映る

二人は、確かにお似合いであり、そのことを美由紀も誇らしげに感じているように思えた。

そのときだ。突然、美由紀が空を見上げ、切り出した。どうして生きているの？と。

「??？」

幸雄には最初意味がわからなかったが、いつものことだと思い、美由紀を見ると、彼女は空を見上げながら、一枚の広告看板を指差した。そこには、たしかに英語で、

why do you live?

とかかれた文字があつた。タバコの広告にしては、やけに挑戦的だとそのときは思ったが、そんな幸雄に関係なく、彼女は珍しくまじめな顔で、

「私は、幸雄がいるからだよ。」

と答えた。

彼女との付き合いは大学1年の春から卒業まで続いた。

「もちろん生きているんだろうな・・・」

少なくとも、今の彼女の隣には幸雄はいないわけなのだが・・・

そんなことを考えているうちに、電車は、速度を落とす、いつもの降車駅に滑り込む。

いつもと変わらない朝だった。

競争社会で勝つためには、競争してはだめだ。何も仕事だけに限った話ではない。生きていく上においては、それはすべてにあてはまる……。

会議後のエレベーターの中で由香里はそう漠然と思う。

いつまでもここに居てもいいのだろうか、それとも……。何も外資系証券会社での今の仕事に不満があるというわけではない。給与も同年代の女性とは比較にならないくらい（当然、男性ともだが）もらっている。ただ、今のままではだめだ。ここは自分にとっては、本来、居るべき場所ではない。いや、そもそも居るべき場所なんてあるのだろうか？

そう考えているうちに、エレベーターがゆっくりと止まり、扉が開く。

「なんだ、浮かない顔をして？会議、うまくいかなかったのか？」敏行だ。瀬川敏行とはもう四年来の付き合いになる。由香里がこの会社に転職してきた当初、敏行は同じ課に属しており、同年代だということもあり、色々と事細かに世話を焼いてくれた。だが、時折見せる空虚さは、由香里に同種の人間だと感じさせ、気が付けば、ただ時間を埋めるためだけに、一緒に酒を飲み、意味も無く抱き合う関係になっていた。

あいかわらず高価なスーツをそれとなく上品に着こなし、控えめな香水の匂いが、かすかに香る。いつも、朝、妻との軽いキスを済ませた後、もう5歳になる娘にかけてもらうのだという。

「あら、あなたに人の気持ちかわかるなんて驚きだわ。」

と、一種、救われたような微笑みで答えると、一拍置いて、「今日、一杯付き合えよ。いつものところで待っている。」

と、他の女性社員なら誰でも喜んで連いて行くような笑顔を残して、エレベーターに乗り込んでいった。

もちろん、会議はうまくいった。

自分のオフィスに戻り、皮製の椅子に腰掛け窓の外を眺めながら、考える。窓の外には、競い合ったようにひしめき合ったガラス張りの高層ビルが立ち並ぶ。初夏だということも手伝い、ガラス窓には青い空が整然と並んでいた。

会議では、前回より由香里が提案していた案が採用されたが、そんなことはどうでもよかった。

仕事に不満はない。ただ、今のままではだめだ。

由香里さんって、欲が無いよね。

もう、八年も昔の話だ。

八年。その、長さに驚き、同時に、それを引きずる自分に嫌気がさし、しかし、まだ引きずっている自分は、何かに間に合う気も、由香里はした。

今日の夜、敏行にこのことを話してみようか？きつと、驚くだろう。そう思うと少しだが、心が軽くなったような気がした。

窓の外ではもう、少しずつ日が落ち、高層ビルはもはや空を映し出さずに、そこで働く人々のせわしなく動く姿を見せ始めていた。

知り合つてまだ半年も経たないが、大山郁子について幸雄はかなり好印象を持っている。初めての待ち合わせの時からして、すでにそうであつたが、彼女は決まって何かしらの本を読んで待つていた。たいていの場合は、どこかしらの海外の作家が書いた書籍なのだが（大学2年の頃、初めて海外に留学してから、本人いわく、日本以外の考え方が知りたいのだそうだ）、彼女に言わせると、今日みたいに風が少し弱く吹き、街の空気がどこか淋しく感じるような夜には、日本の作家が書いた恋愛小説を、読むのではなく眺めて待つているそうだ。

品川の駅前には、会社帰りのサラリーマンでこつた返している。

少し遅れて待ち合わせの場所にやってきた幸雄は、その中から郁子を見つけ、近づいていくと、案の定、郁子は本を眺めて待つていた。本から顔をあげ、幸雄に気づくと少し微笑み、本を皮製の鞆の中に丁寧にしたった。

「恋愛小説？」

幸雄がネクタイを少し緩めながら、いかにも遅れて申し訳ないというさまで聞くと、

「たぶん、恋愛小説。ってか、遅いよ。」

と、薄いピンク色の口紅が薄く塗られた唇を、少し尖がらせながら答えた。幸雄はこれを、半分、漫画のようだと思いながら、しかし、女子大生がすればどうして許せるのだらうと思い、自分も相応に年を取ったのだなと思えた。

軽い食事を済ませた後、バーは駅から歩いて一〇分程度のところにあつた。郁子が大学の友人から噂を聞き、一度は来てみたかつたということだ。

店内は薄暗く、壁一面にはいくつもの小さな古めかしい絵画が所

狭しと掛けられ、それらは間接照明に仄かに赤く照らし出されていた。カウンター席の奥には様々な国のボトルが並べられていた。

幸雄と郁子は、一番奥の大きなガラス張り窓の近くの席に腰掛けた。ここからだ、窓の外のライトアップされた一棟の高層ビルが幻想的に美しく見える。

「素敵なところね。駅から近い割には閑静なところだし。」

郁子がそう言うと、幸雄は窓の外を眺めながら、

「ほら、見て。あそこのビル。月があんなにはつきりと映ってる。」

と、郁子の連れてきた店を、それとなく褒め称えた。

郁子は、まんざらでもない様子で、メニューを眺めながら、

「今日はとことん飲もう。明日は、休日だし。」

と、まだ幼さの残る笑顔で幸雄の賛辞に応えた。

酒を啜りながらの他愛の無い、それでいて楽しくないといえは嘘になる話も尽きてきて、夜も深まり、郁子が、この後どうしようと、切り出した頃、隣の席の会社帰りと思しき女性二人組みの会話が、聞くと無く幸雄の耳に入ってきた。

「あそこの公園でも売っているらしいよ……例の薬……今はまだ、あれだけど、どんどん高くなっているし……」

そこまで聞くとともにしに聞いていると、郁子が、

「ほら、幸雄。もう、行くよ。何、ボーっとしているの？」

「ああ、ごめん、ごめん。」

と、幸雄は郁子に促されるまま、店を後にした。



昨日は結局、敏行とは飲まなかった。いや、飲めなかった。

あの後すぐ、取引先から電話があり、また別のデータを用意して欲しいということで、夜中までデータの整理にてこずっていた。

その間、敏行から電話があり、飲みには行けないことを伝えると、

「じゃあ、明日の昼はおまえのおごりだな。」

と、敏行らしいやり方で気遣ってくれた。電話の最後に、

「さすがだが、約束忘れるなよ。」

と、敏行らしい労わりの声で付け加えて。

こういう時の敏行は、素直に好きだと、由香里は思える。

そういうわけで、今、由香里は敏行とオープンカフェに来ていた。高層ビルが立ち並ぶオフィス街に、周りから取り残されたような小さな森林公園があり、その一角にその店はある。店全体が一本の樹に覆い包まれ、天気も良いということもあり、木漏れ日が二人のテーブル席に光と影のまだら模様を織り成す。

「少し暑いわね。」

と、由香里がスーツの上着を脱ぎ、真っ白なハンカチを額に押し当てながら言うつと、

「もう夏だからな。」

と、麻でできたカジュアルなスーツの上着を着たまま、十分涼しそうな顔の敏行は当たり前前のことを言い、足を組替え微笑んだ。

二人はこの店が気に入っていた。正確に言うつと、昼食時のピークを過ぎたこのくらいの時間に、この店に来られることをだ。店は日本人のオーナーシェフが切り盛りしている。顔に似合わず、繊細な料理をそこその値段で提供しているということと、その立地条件に合った洋風の淡く、どこか懐かしさを感じさせるモダンな店の造

りと相まって、昼食時ともなるとビジネスマンやOLの姿で埋め尽くされる。

しかし、ピークを過ぎると途端に人影はまばらになり、また、もとの静かな落ち着いたオーブンカフェに戻る。由香里も、このときばかりは時間に融通のきく仕事に感謝をし、人と時間をずらせることほど、贅沢なことはないと思う。

目の前では、敏行が、昼間から（といっても、ずいぶん遅いが）グラスワインを飲んでいた。いくら酒好きの由香里でも、徹夜明けの昼間から飲むほどの気力は持ち合せていなかった。

隣の席では老人が、新聞を読みながら、煙草をふかしている。

二人は食事中、お互いの仕事について二言三言、冗談を交えながら意見を出し合った。仕事から離れている時にまで仕事の話しをするなどという同僚もいるが、二人はこの考えを全くの見当違いだと認識していた。仕事から離れているときにこそ、今の仕事の状況を客観的に見つめられるのではないかと。

食事も終わると、コーヒーが香ばしい香りとともに運ばれて来た。敏行は一口、静かに啜ると、由香里とまっすぐに向き合い、それまでとは打って変わった態度で、由香里をまっすぐに見つめ、静かに切り出した。

「何を悩んでいるんだ？」と。

来たか、と由香里は思った。

どうして敏行にはわかられてしまうんだろう、とも。

由香里は、身じろぎせず、上着を着ながら、

「仕事、辞めようかと思っているの。」

と、半ばそれがいつもの仕事に関する情報の交換のように、そう答えた。

驚きを隠せないといった表情の敏行は、呆れたとでも言うように、「悩んでいるとは思っていたが・・・しかし、また、突然どうして？男絡みなんて言わないよな？」

「男なんていないわ。あなたが一番、知っているでしょう？そんな

単純なことじゃ……」

由香里は、敏行らしいな、と思った。結果があれば、必ず原因があると思う。しかし、原因はそんなに簡単に剥がれるような生易しいものではない。もっと、深く、体の細胞一つ一つに刻み込まれ、長い時間をかけて化膿し、かさぶたとなつて張り付き、それでもそれをいじらずにはいられず、また血を流し悪化するような……

由香里はそれを話そうかとも思った。だが、思ったと同時に、話せば自分の中の何かが崩れていくような錯覚に囚われ、そう囚われる自分を哀れで孤独だと感じずには、いらなかった。しかし、哀れで孤独だが、それが今の自分自身を、何かから唯一踏みとどまらせているものだとも……

それで、しばらくの沈黙の後、席から立ち上がり、

「あなたには関係ないことよ。」

と、言うので精一杯だった。だが、発せられた声がひどく弱々しいことに、由香里自身も困惑せずにはいらなかった。細心の注意を払ったつもりだった。

敏行の目はひどく傷ついたように、だがそれは傷つけられたというよりむしろ、自分と同じような人間を哀れむようであり、由香里はそんな目をさせるに耐えきれず、

「でも、今すぐにと言っわけじゃないわ。」

と、なんとか平静を装った。

それからの会社までの帰り道、敏行は理由について一切触れなかった。

だからまた、何気ない会話の後、由香里は自分のオフィスに戻る間際、敏行に、

「心配しないで。」

と、いつものように静かに微笑んで見せた。

由香里は自分のオフィスに戻り、敏行の背中を背景にしてゆっくりと扉を閉める。それから立ったまま、窓の外をぼんやりと眺めた。すると途端に、途方もない不安が押し寄せてくるのがわかり、由香

里はすぐさまパソコンの青白い光に向き直るのだった

雨。今朝は早くから雨が、灰色の街全体を濡らしている。

幸雄は、ホテルの窓から出していた手を引つ込めると、すぐに窓を閉め、すやすやと隣で眠る郁子を起こさないように、静かにベッドから降りた。

そして、裸足のまま煙草と灰皿、起きてすぐに用意していたインスタントコーヒーの入ったカップを手に持ち、そのまま部屋の玄関付近にある清算機の前の床にぺたりと腰を下ろした。郁子は、煙草の匂いを極端に嫌う。なので、ラブホテルにある入り口とベッドルームの扉の間にあるこの清算機のための空間が、幸雄にとってお決まりの喫煙スペースである。

幸雄は煙草に火を付けると、ゆっくりと肺の奥深くまで吸い込み、そしてまた、ゆっくりと煙を吐きだす。そして、インスタントコーヒーを一口飲み、また、ゆっくりと、煙草の煙を吸い込んだ。ここでもうして目を閉じていると、廊下から聞こえてくる何やら訳のわからない騒々しいだけの音楽が聞こえてくる。

「結婚するなら、煙草を嫌がらない女がいいな。」

と、まだ、眠気の覚めない頭で考えていた。

清算機のデジタル表示は、まだ朝の7時を示している。

幸雄はもう一本吸ってから、もう一眠りしようと、煙草に火を付けようとした。

ガシャンッ!!

その時、隣の部屋から、何かが割れる大きな音がし、大声で叫びあう男女の声が聞こえてきた。

幸雄は、火を付ける手を止め、何事かと静かに耳を澄ませた。聞き取れはしないが、男のほうで、声を荒げているようだ。

しばらくすると、隣の入り口の扉が勢いよく開く音がし、扉をひら

けたまま、女が中にいる男に向かって何かを叫んでいる。

幸雄は、まだ目が覚め切らないまま、ゆっくりと立ち上がり、玄関の扉の覗き穴から、外を見てみた。

「?!!!・・・美由紀?!」

その女の顔は一瞬しか見えなかったが、幸雄には、確かに美由紀に見えた。幾分、化粧が濃く感じられたが、確かに美由紀に見えた。

別れて、もう5年も経つが、幸雄にとって簡単には忘れられない存在だ。

女は勢いよく扉を閉め、そのまま走り去るように駆けて行く。途中、靴から何やら小さな容器らしきものを落とした事にも気づいていない。

幸雄は女が走り去った後も、呆然と覗き穴から外を眺めていたが、何を思ったか我に返ったように、ベッドルームに戻り、ベッドの脇にある電話でフロントに電話をかけ、煙草が切れた、自販機まで買いに行きたいので玄関の扉を開けて欲しい、と伝えると、玄関の扉が開くのを待ち、扉が開くと、辺りの様子をそっと確認し、誰も居ないことを見計らって、その落として行った小さな容器を拾い上げ、すぐさま部屋に戻った。胸の鼓動は、早鐘のように鳴っている。そして、幸雄は、また、清算機の前に座り込むと、胸の鼓動をおさえ、その紫色の小さな容器をまじまじと眺め、中を開けてみる。中には、乳白色の薬らしきものが十数錠と、どこかの店の、名前は亜樹と書かれた名刺が数枚、入っている。幸雄は、再び、震える手で煙草に火を付け、その名刺を天井のライトに透かせながら、しばらく呆然と眺める。

ベッドルームでは、郁子が何も気づかないまま、すやすやと幸せそうな寝息をたてていた。

直之は帰り際、決まって由香里にこう言っていた。

「じゃあ、また・・・夢でも会いたいな。」

初めてのデートでそう言われたとき、由香里は、「あ・・・ミスったかも。」と、一人げんなりもしたものだ、しかし、その後もデートを重ねるたび、帰り際になると、直之は決まってそう言うので、由香里は仕方なく聞いてみると、

「だって、由香里さんは仕事を始めたばかりで忙しいし、俺だってバイト、休むわけにはいかないから・・・なかなか会えないじゃん。だから、俺は、せめて夢で会えたらな、

と思つて・・・今日の夢での待ち合わせはこの駅にしない？」

川原沿いの駅に着くや、まだ幼さの残る笑顔で直之はそう言った。この駅は丁度、由香里と直之の乗り降りする駅の中間に在った。確か、へたなキスも済ませた後のデートの帰り道、春の暖かな夕陽の中で、散り始めた桜の花びらが柔らかな風に運ばれる中でのことだった。直之の高校の制服の肩に付いた桜の花びらを由香里はそつとつまんで、何故だかそれを、そつとポケットの中に入れた。

それから、別れ際になると、直之は決まって

「じゃあ、また、いつもの駅でね。」

と、さよならをするのだった。

朝。ベッドの中で泥のような眠りから覚めた由香里は、あんまりだ、と思った。頬にはうつすらと涙の後が残る。

付き合っている頃は、一度も夢の中に会いに行こうとしたことはない。

幼すぎるとさえ思っていた。

それが、今では気づけば、ひとり夢の中、あの駅で待っている・・・

もう二度と、会うことも出来ない・・・

夢でも現実でも・・・

八年もの間、由香里は、夢の中、ひとり、待ちつづける。

駅には、人の気配なんかしない。

会えたからといって、どうすることも出来ない。

直之は、もうこの世にいない。



隣には昨日、バーで声を掛けてきた名前も知らない男が寝ていた。

由香里は、誰だかもわからない男の耳元で、こつ、小さくささやいた。

「私が殺したの。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3295d/>

---

恋した人々

2010年10月11日00時18分発行